

# その他の

## 青春と戦争（台湾）

栃木県 赤羽 勇

私は大正九年二月二十三日、栃木県芳賀郡七井村に生まれました。今でこそ益子焼（マシコヤキ）で有名な益子町も、当時は七井村（ナナイムラ）、田野村、益子町に分かれており、とくに農家の生活は楽ではありませんでした。

私の家は農家で（水田一町歩、畑五反歩）、家族は十人（両親と子供八人、私は長男）もいて、生活は苦しく両親の苦勞を身にしみて感じ、早く家計を助けねばと思っていました。

ちょうど折よく船員をしていた親戚よりの助言もあり、私が十六歳になるのを待ち大阪へ出て、共立汽船の「万代丸」に乗り込むことができて当時、大変喜んだことを思い出します。

私は年少者ということで船長付きの任務です。給料は本給三十五円、手当十五円、計五十円と望外の幸せでした。何しろ当時は小学校校長の給料が四十五円くらいのことでした。私は本給の三十五円をそのまま全部家族へ送金し、手当の十五円も大部分は貯金しました。船の中の生活ですから何も使い道がありません。

昭和十二年六月一日、「万代丸」（六千トン）は北方鯉鱒船団の母船としてカムチャツカへ行くこととなり、他の母船と函館港で合流し、護衛の駆逐艦数隻と共に、流水の残るカムチャツカを目指しました。

途中、私と一緒に乗船した若い見習水夫が急死し、水葬礼の中、暗い海の中に遺体が沈むのを見て、不吉な予感に襲われました。約十日間かかりペトロパブロフスクの北方の漁場に到着、数多くの船団の母船として、昼夜を分かたず交代勤務で作業を続けました。現地では太陽は水平線の上に少し見えるだけで、夜も昼もない、いわゆる白夜の世界でした。

水葬礼は、死体をハッチボードに乗せて日の丸の国旗で巻き、両端に錨を一個ずつ付けて海中へ入れ、船はその周りを三回旋回しながら汽笛を鳴らし、お別れするのです。

鮭鱒船団については、母船は八隻（七隻は缶詰作業と貯蔵、「万代丸」は監督母船でソ連側よりゲーベールが監督に乗り込んでいた）。一母船あたり約三百隻近い漁船がついている。

操業を始めてから約十日くらい経って、無電命令により「万代丸」のみ戻り広島県宇品港へ入港、兵員輸送のための大改造が始まり、船首には大砲も取り付けられ、私ども全員が異常な事態に驚いたことです。そ

のうちに乗組員も大幅に増員され、船倉には何段にも兵員用、馬匹用の間仕切りと食糧、飲料水が積み込まれ、七月中旬大分県別府湾に他の船団と合流停泊して、七月下旬「万代丸」には大分連隊の兵員、馬匹、武器弾薬が積み込まれ満船となりました。

間もなく、他の輸送船と船団を組み出航、門司港を過ぎると、第三艦隊の十数隻の軍艦の護衛を受け、東シナ海へと航行しました。時折日本軍の飛行機が上空を警戒掩護し、船橋には連隊旗が安置され、着剣の衛兵と船長、輸送司令官が海図を見ては航海士に指示をしており、ものものしい様子でありました。船倉では悪臭と高温、高湿に加えて船酔いに苦しみ、食事もできぬ者が多かったです。

七月二十五日ころ、海面が黄濁色に変わり、揚子江の河口近くなり、目的地が知らされました。そしてその那の呉淞方面に上陸することが分かり、船内ではその戦闘準備に追われはじめ、刻一刻と緊張が高まりました。将校たちが次々と輸送司令官の指示を受け、船橋の階段を上下し、船長も航海士を通じて乗組員に指示

を与えるなど上陸に備えました。二十七日ころ護衛の軍艦も多くなり、戦闘隊形をとり、呉淞及び上流地点に到着、合図を待って一列縦隊となり一斉に投錨、艦砲射撃と共に上陸を開始しました。

本船のマストすれすれに大型砲弾が飛び交い、すさまじい砲音で耳も聞こえません。縄梯子を幾条も下ろし、軍旗はトラップより下ろされ、上陸用舟艇に乗り込む間もなく舟艇は次々と発進し、軍馬は数頭ずつ大きな網籠にのせクレーンで下ろされ、舷側から岸まで泳がせて上陸させました。敵の反撃も旺盛で、船体は絶えず揺れていたことを思い出します。

多くの負傷者も出たようですが、ともかくにも上陸は成功です。四〇度近い暑さと黄濁した揚子江やクリークの水。上流からは敵兵と思われる屍体が船体のそばに流れ着き、異様な臭いが長い間忘れられませんでした。その後も何度か上陸作戦に参加しましたが、いずれも成功し、特に杭州湾では例を見ない大規模上陸作戦にもかかわらず、戦闘はほとんどなかったようでした。

昭和十三年二月になり、神戸港より多数の弾薬、航空爆弾、四斗樽入り日本酒を積み込み、揚子江上流の南京に到着しました。白銀に雪化粧した南京は、日本軍の制圧の直後とあって凍った地面には敵の屍体があちこちと点在し、またブロック積みの城壁は屍体の山でした。

昭和十二年三月十五日、一応の上陸作戦終了のため、陸軍輸送船の任務を解除され、宇品港に戻り、改造の後、一般遠洋航路の仕事に就きました。サイゴン港より外米の輸送、マレー半島より鉄鉱石の輸送などに当たりました。その後、大阪商船の朝鮮定期貨客船「豊津丸」に乗り、南鮮北鮮航路に従事。特に北鮮の雄基港はウラジオストックの少し南の国境にあり、真冬には零下三〇度になり、船室外では、すべての物が凍るほどでした。船の着氷をハンマーでたたき落とす作業を見て驚いたことでした。

昭和十五年四月、船舶無線通信士の資格を得るため、東京の無線学校へ入学しました。

無線学校入学の動機―私は十六歳で船員として初め

て「万代丸」に乗船し、勤務は船長付きという関係上よく無電室へ出入りしました。無電室勤務者四名のうち、一名は東京無線学校卒業で船舶無線通信士の免許保有者でした。その人が私をよくかわいがってくれて学校への入学を進めてくれ、また仕事の合間に実技の指導やら学術やらいろいろと親切に教えてくれました。また同じ乗組員でも通信士は地位、報酬その他で一般乗組員と雲泥の格差があることを知らせてくれました。私は月収の中から、本給を家庭送金、手当を私の貯金とすることを乗船以来続けていましたので、学校へ入るための費用は自分の貯金で十分であり、何ら支障はありませんでした。

昭和十六年十二月八日、在校中に太平洋戦争が始まり、そのため繰り上げ卒業となりました。卒業とともに、予め希望していた航空輸送部に採用されました。

次いで暗号教育受講のため、東京三宅坂の参謀本部において作戦暗号の教育を二週間受けました。同僚は十二名で身元調査が厳しく、憲兵が七井村の実家へ来て驚いたと、後日、父が申しておりました。

参謀本部の教育終了とともに、私は同僚を引率して宇都宮飛行学校に配属され、加藤中尉に実技訓練を受けました。

次いで岐阜県各務原航空隊へ入り、陸軍の重爆撃機「キ二十一種機」に無線手として搭乗、七機編隊で中国經由南方へ出発しました。途中九州の新田原飛行場に到着後、米機の日本本土初空襲に遭遇しましたが、機体、人員共に無事でした。

翌日、中国の上海に飛び、黄砂のため着陸不能。南京も駄目。夕刻過ぎ燃料切れとなり、上海近くの民間飛行場へ強行着陸しました。引き続き台湾の屏東に着陸。台北航空隊無線室勤務を命ぜられ着任しました。以後、昭和十七年十二月末、台湾軍師団通信隊に召集入隊するまで、主任通信手として内地、滿州、朝鮮、中国、仏印、南方と各方面の中樞基地としての、基地対基地、基地対航空機の連絡、氣象通信の連絡等にあたり、その間、東条英機陸相、朝香宮殿下搭乗機との交信も経験しました。

昭和十七年十二月末、台湾軍に師団通信部隊が新設

され、同部隊に召集入隊しました。初年兵はつらいものと心配しましたが、教育要員不足のため経験者としての取扱いを受け、一般教練を除いては古年次兵、下士官の教育を受けました。一期の検閲がすむと星二つになり、部隊長より正式に教育係を命ぜられました。古兵、下士官はもとより、見習士官の無線通信教育には気骨が折れ、内務班では初年兵、教室では助教として変な軍隊生活を送ったものでした。お陰でビンタの味は皆無でした。

三〜四カ月して一応の教育がすむと、部隊の大部分（約五百名か？）の者はジャワ方面へ送り出され、部隊長以下約五〇名が残りました。私は残留組で初年兵ではただ一人でした。残留部隊は小人数のため家庭的気分が濃く、私は特に部隊副官より大層親切にしてください、有り難いことでした。これも皆「万代丸」の無線室の先輩のお陰と遙かに合掌したものでした。

部隊では野外訓練が大部分で、特殊な業務のせいかな上下の差別はあまり感じませんでした。無線機は送信、受信と別なもので、甲三号、乙二号を使い、野外訓練

では本隊に発電機アンテナなどを自動車で運び、重爆基地と交信しました。

そのうち、戦局の激化に伴い、敵の台湾上陸説が強くなり、「各部隊は散開して、台湾山脈に陣地構築せよ」との下令がありました。我が部隊は台南競馬場へ移駐しました。移駐完了直後、米軍のB29やグラマン戦闘機の大空襲を受け、再び高雄港東方の山地に移動標高百メートルくらいの地点に本部を置き、各分隊はそれぞれに散開しました。その後は敵機の目から逃げながら、陣地構築やら山裾よりの食糧、弾薬の搬入を続けました。当時は一八万〜二〇万人といわれた台湾軍で、五年間守り抜くと決意したと聞きました。

山中生活に移ると、ほとんどの者がマラリアにかかり、私もその一人として苦しみました。マラリアの薬を服用すると胃をやられ、栄養不良となり、体が弱る、などの悪循環となります。マラリアには熱帯熱（毎日発熱する）、二日熱（二日に一回発熱する）、三日熱（三日に一回発熱する）と三つの種類があります。私は二日熱で一日おきに発熱しました。部隊の者の症状

はいろいろで一定ではなかったのです。

マラリアとは台湾、中国、南方諸地域に限定して発生する伝染病の一種です。病原体はハマダラカが媒介、発病すると、まず悪寒で齒がガチガチするほど震える。その後約四〇度の高熱を発して仕事も何もできない。

専門の薬があり、それを服用すると胃を痛めて食事ができなくなり、栄養失調となります。太平洋戦争中、南方戦線では幾百万人の日本軍が死亡しましたが、その中にはマラリアが原因で亡くなった率が高い。悪寒、発熱と二時間程度続き、その時間帯はもう廃人同様です。唯一の治療法は良質の薬を服用、安静、栄養と時間が長くかかります。私は内地帰還して、自宅へ復員後も七、八年くらい、マラリアに悩まされたものです。自宅で飼っていた鶏を一〇羽をも全部自分一人で食べるくらい、専ら栄養を取ることに努力しました。今でも当時の状態を昔話の種にして笑われています。とにかく恐ろしい伝染病に部隊員のほとんどの者がやられました。これでは部隊すべて病人で、肝心の戦闘力がないわけです。

こんな状況に陥り、軍司令官命令で蛇、山鳥、トカゲ、野菜類を捕食せよとのことで、第十四分隊で高砂族二名を配属してくれて私は食糧係専門となり、台湾錦蛇、兎、雉、山鳥、山芋などいろいろ工夫して栄養保持に苦労しました。

敵の攻撃もなかなか執拗を極め、我が部隊のいる高雄港東方の山中から港を俯瞰すると、敵艦に日本の商船が魚雷で撃沈されたり、敵艦が悠々と浮上航進したり、敵機の攻撃で火災になるなど、我々は見ているだけで何もできません。何しろ制海・制空権すべて敵に握られていては処置なしでした。

八月十五日無線が入電し、「戦争は負けた」「全面降伏」との状況が判明、部隊に大きな動揺が起こりました。それを裏付けるように、今まで昼夜を問わず、上空を我がもの顔に飛び回っていた敵機も、ピタリと姿を見せなくなりました。

今までの決戦準備、陣地構築、演習訓練は一切なくなり、マラリアのためもあり、休養治療に専念することになりました。そのうちに山中の場所から高雄港近

くの国民学校の校舎へ移りました。

休養、身辺の整理に明け暮れ、次第に気分も落ち着いてきました。間もなく私は臨時召集解除となり、元の台北の航空隊無線室へ仮復員しました。しばらくそこで生活していましたが、間もなく延安（毛沢東の本拠で北中国の西安の北方にある）より先発隊が到着しました。中国大陸と連絡をしているとのこと。私は一緒に住むのはどうかと思い、親切な上官と相談して台北市内の日本人宅へ下宿をして、日本の繊維会社の倉庫の夜警となって帰国の日を待ちました。

当時の台北市内は、軍の施設、行政府等は徹底的に空襲でやられていましたが、一般社会は物価統制もなく、物資も豊富で、当時の金で一日当たり五円もあればゆったりと食べていけたと思います。航空隊よりの退職金があり、その上、部隊の大江副官より鶏でも飼うようにと大金をいただき、人の情をしみじみと感じたことです。

昭和二十一年一月、部隊よりの連絡により内地帰還するため至急帰隊せよとのことで、再び召集され、高

雄港付近にいた部隊に合流、懐かしい戦友と再会して手を取り合って喜んだものです。部隊長はじめ幹部の人にも大事にしてもらいました。

三月十日ころ、リバティール船で思い出深い台湾と離れ、三月十五日、広島県大竹港入港、上陸。生きて日本内地の土が踏めたと、部隊一同心の底より喜びを分かちあい、武運を祝ったことです。

やがて死なば共にと誓いあった戦友と名残り惜しい別れを交わし、有蓋貨車にすしずめとなり、途中三回の乗り換えをして、二カ月後に夢にまで見た故郷の我が家へ復員しました。

列車輸送の途中、無残な焦土と化した沿線の都市、祖国の敗戦の姿を、次々と感無量の思いで見ました。茫然とするのみでした。

帰宅はできましたが、長い間マラリアに苦しみました。家族の温かい庇護を受け、休養栄養に専念、昭和二十二年四月、地元の農業会書記の職を得、協同組合を経て、八年後日本専売公社宇都宮地方局茂木出張所煙草耕作指導員となり、昭和三十五年父親が死亡する

まで勤務しました。

父の死亡後は実業の農業を継ぎ、いろいろの役職を勤め、お陰様で七十八歳の現在も元氣です。土地改良区、農業年金友の会長、農業者年金協議会長、恩欠連の支部長、恩欠県連の組織委員長等をやらせていただきながら、子供二人孫四人に恵まれ、毎日を感謝と合掌で幸せいっばいに暮らしております。

要するに私の苦勞の最たる者は、マラリアであり、その後遺症の期間を含めると十年の長い年月を苦しめられました。

### 歩兵と航空兵の兵役六年間

愛媛県 和田 佐太郎

私は、大正八年二月二十五日、愛媛県温泉郡川内町南方二六〇三で農家の長男として生まれました。昭和十四年徴集で、十四年十二月に台湾歩兵第一連隊補充隊第四中隊（台北市）入営です。

入営当時の私の家族は次のとおりでした。

父 健在 農業 水田七反、果樹園三反、畑一

反、山林一町三反。

母 “ “

弟二人 “ 学校及家事手伝い

妹四人 “ “

私が兵役に服するため家を出ることは、多少マイナスイ面もありましたが、時局柄泣き言を言える世相ではなく、父母に励まされて勇躍郷里を出ました。時に昭和十四年十一月三十日。

小学校で四人の入営者が、村長、在郷軍人会長、その他の幹部から激励、祝福を受けて覚悟を新たにし、私が代表として挨拶を述べ、それぞれの目的地へと出発したことを懐かしく思い起こします。四人出征して一人戦死、二人は戦病死（三人とも南方方面とか）、生還者は私一人で、復員当時はめでたいのか、悪運が強いのか、変な挨拶をされて若干肩身の狭い気分でした。

当時の川上村を出て隣村の横河原より電車で高浜へ、